

## 松本サリン事件被害者遺族 小林 房枝さんの手記

私は、1994年6月、松本サリン事件で亡くなった小林豊の母です。豊は、大学でシステム関係を学び、卒業後、1993年4月に電機メーカーに入社しました。入社してから1年間、東京の本社で研修を受けた後、1994年5月に松本市にある工場へと長期出張することが決まりました。松本なら、豊が趣味にしている溪流釣りもできると思い、私は、豊に「よかったね」と述べました。その後、豊から、「信州そばを送ったよ」と連絡がありました。そばが届き、お礼の電話を入れた時の会話が、松本サリン事件が発生する1週間くらい前のことで、それが豊との最後の会話となりました。

事件については、1994年6月28日の午前4時を過ぎた頃、松本の消防署からの電話で知らされました。主人がその電話を取ったところ、「息子さんが危篤状態で、病院に搬送しました」と告げられました。病名なども分からず、何が起きたのか聞いたのですが、「事件が発生し、負傷者がたくさん出ています」としか説明されませんでした。そして、それから5、6分後、再び消防署から電話があり、「息子さんは、今、亡くなりました」と伝えられました。その後、午前5時30分頃、主人と車でお家を出発しました。私は、車の中でも、「一体、豊は何に巻き込まれたのだろう。交通事故かな。それともガス爆発かな」などと、いろいろと考えながら松本に着いたのは、28日の午前10時過ぎ頃でした。最初は、豊が搬送されたという松本市内の病院に行きましたが、既に警察署に移送された後ということであつたので、すぐにその警察署に行きました。豊とやっと対面して、「なぜ、こんなことになったのか。一体何が起きたのか」などと、疑問が頭を駆け巡るばかりでした。豊を初めて発見してくれたのは消防士の方で、事件発生後、負傷者が多数いたので、他にも負傷者がいるのではないかと思い、アパートを訪ね回って、豊を発見してくれたとのことでした。豊が発見された時は、アパートの自室の玄関の前で倒れており、まだ意識があつたので、すぐに救急車で搬送したそうです。松本での役所での手続きなどを終えて、会社が手配してくれた車で、豊を自宅まで連れて帰りました。突然に想像を絶するような経験を強いられた私は、事件があつてからしばらくの間は、どうしても再び松本へ行く勇気がなかつたので、豊を松本から自宅まで連れて帰って以降、2009年6月に現地で行われた慰霊祭までの15年間、一度も松本を訪れることはありませんでした。

1995年1月1日付けの読売新聞1面に、宗教団体であるオウム真理教の山梨県上九一色村にある施設内の土壌からサリンの残留物質が発見されたという趣旨の記事が掲載されているのを知りました。私は、この記事を見て驚くとともに、「これで松本サリン事件の全容が解明されるかも」と期待をしていました。「なぜ、このような宗教団体の名前が出てくるのか」と。それまでオウム真理教など、まったく関心はありませんでした。事件発生以後、事件に関する捜査の進展はなく、1995年3月に地下鉄サリン事件が起きてしまいました。その動機の安易さと、とても稚拙なものであつたことには、非常に憤りを感じました。

## 松本サリン事件被害者遺族 小林 房枝さんの手記

私は、訳の分からぬ狂気で偽りの集団の犠牲になった息子のことを思うと、たとえ死刑が執行されても許すことはできません。また、あのような狂気犯罪を起こした宗教団体が名称を変えて存続しているという事実にも納得できません。私は、かけがえのない息子、豊を松本サリン事件で失って以降、オウム真理教、サリン、松本という言葉に敏感になりました。私が住んでいる地域は、天気予報で長野県と同じ地域として放映され、その中で、「今日の松本市の天気は」と案内があるだけでも、豊のこと、事件のことなどを思い出してしまい、つらいです。私の愛する息子、豊が亡くなってしまったという事実は、決して消えることはなく、私の心にも、傷跡として一生残ることでしょう。

(2024年9月記)